



発行 北海道学校図書館協会
 会長 大久保 雅人
 事務局 札幌市立しらかば台小学校
 事務局長 野村 邦重
 TEL (011)852-4090
<http://www.hokkaido-sla.jp/>
 印刷所 ㈱北海プリント
 TEL (011)811-2396

平成23年度 青少年読書感想文全道コンクール 入賞者決定!!

今年も全道から、たくさんの素晴らしい作品が集まりました。第1次、第2次審査を経て、入賞者が決定しました。12月4日(日)に晴れの表彰式が行われます。入賞者の皆さん、おめでとうございます。

第57回 青少年読書感想文全道コンクール 特別賞入賞者一覧 第37回 北海道指定図書読書感想文コンクール

北海道知事賞	*「諦めない事」の大切さ～『はやぶさ』宇宙の旅』を読んで～	札幌市宮の森小	5年	日達 智哉
	* 青空に描いた、魂の響への誓い	遺愛女子中	3年	松下 海星
北海道議会議長賞	*「この坂を越えた先に…」	札幌旭丘高	3年	伊澤 咲弥
	*「あかちゃんがいるの!」を読んで	函館市深堀小	2年	漆畑 元基
	* 命の輝きを忘れない	留萌市留萌小	4年	野々村 奏風
	* こども電車	北斗市石別小	5年	其田 浩平
	* いのちのしずくを受けとめて	札幌市向陵中	2年	樋口 佳南
北海道教育委員会教育長賞	* 「正義」と向き合う	岩見沢東高	2年	小笠原 彩
	* やさしいはたけ	北斗市谷川小	2年	宗山こゆき
	* 『ファール昆虫記』を読んで	苫小牧市錦岡小	3年	高橋知佳子
	* 「あきらめない心」	旭川市知新小	5年	村山 健
	* 目に見えない大切なもの	藤女子中	1年	齋藤 彩夏
北海道学校図書館協会会長賞	* 孤独と人と人形	帯広三条高	2年	佐伯 拳垂
	* こころって何	函館市深堀小	2年	丸山 紗世
	* 「わたしのとくべつな場所」を読んで	旭川市神居小	4年	片山 葉月
	・ 自分を見つめ直す心『こども電車』を読んで	室蘭市陣屋小	6年	富田 理大
	・ こぎ続けよう、僕のペダルを!	札幌市篠井中	1年	伊田 晃都
毎日新聞社賞	・ 「野川」を読んで	札幌啓成高	2年	神野 真由
	・ 大切ないのち	室蘭市八丁平小	2年	石川 弥実
	・ 「ヤマトシジミの食卓」を読んで	八雲町東野小	4年	渡部 真緒
	・ 『アンモナイトの森』を読んで	函館市駒場小	6年	佐々木祥汰
	・ 「卵の緒」を読んで 絆とは…	札幌市発寒中	2年	太田みのり
北海道読書推進運動協議会長賞	・ 『蜘蛛の糸』を読んで	八雲高	1年	海藤侑里子
	・ ぼくもなきむし	函館市亀田小	1年	平田 稜登
	・ 「人間失格」を読んで	小樽市朝里中	3年	川原田知美
北海道青少年育成協会会長賞	・ 今、翔び立つ。鳥の視線で。	札幌南高	1年	伊田菜々花
	・ 「ガラスのうさぎ」を読んで	留萌市潮静小	5年	市川 夏鈴
北海道PTA連合会長賞	* 『聖夜』を読んで	七飯町大中山中	3年	福井 捺美
北海道高等学校PTA連合会長賞	・ 十歳のきみへ	留萌市緑丘小	5年	布施 瑠花
北海道教育振興会長賞	・ 雑音	函館中部高	2年	越智つぐみ
	・ 「きょうだいは70人」を読んで	函館市深堀小	2年	上貞 西輝
	・ 「今、ぼくにできること」	札幌市前田中央小	4年	小島 海翔
	・ 北海道・共存していく未来へ	七飯町大中山小	6年	中島 結
	・ 『西の魔女が死んだ』を読んで	旭川市東光中	1年	吉田 真優
北海道教育文化協会賞	・ 心のカルテ	函館中部高	2年	佐々木那奈美
	・ 運命の力	苫小牧市明倫中	3年	蓼沼富貴子
	・ 「天地明察」を読んで	帯広緑陽高	3年	三浦 士
はるにれ賞	・ パトリシア、勇気をありがとう	八雲町東野小	4年	佐々木来都
教育出版社賞	・ 天風の吹くとき—林子の夏物語	森町駒ヶ岳小	6年	ジースティン
文研出版社賞	・ はじめてのゆうきを読んで	室蘭市旭ヶ丘小	2年	伊藤凜太郎
北海道図書教材協会賞	・ “とくべつな場所”が教えてくれたこと	幕別町白人小	4年	西山 藍那
図書館ネットワーク賞	・ 鈴とリンのひみつのレシピ	函館市北美原小	3年	永井ことみ
北海教育評論社賞	・ 子供達の笑顔の為に	室蘭市地球岬小	6年	竹野 留里
光陽社賞	・ 「おかえり、またあえたね」を読んで	留萌市沖見小	2年	高松 莉恵
学 校 賞	小学校の部	函館市立深堀小学校		
	中学校の部	該当校なし		
	高等学校の部	北海道岩見沢東高等学校		
	* 印は、全国コンクール応募北海道代表 (自由・課題) 作品です。			

北海道知事賞

「諦めない事」の大切さ

～『はやぶさ』宇宙の旅』を読んで～

僕が、「はやぶさ」という探査機がある事を初めて知ったのは、春のあるテレビ番組での事だった。そこには、「はやぶさ」が様々なピンチを乗り越え、小惑星「イトカワ」でのサンプル採取に挑み、無事、地球帰還を果たすまでの道程が映し出されていた。

それからしばらくたったある日、僕は書店で、地球から旅立つ「はやぶさ」が描かれている、この本と出会った。宇宙について興味があった僕は、すぐにこの本を読んでみたくなり、手に取った。

この本は、僕に、諦めない事の大切さを教えてくれた。それは、どんな困難な事があっても逃げずに立ち向かい、勇敢に挑戦しつづける事だ。

僕は、計画性や根気がなく、色々な場面で、少し気を抜くとついつい怠けてしまい、母に、

「もう少し真面目にやったら。」

などとよく言われる。言われた時は、「よし、やるぞ。」という気持ちでやるのだが、一時間ぐらいたつと、「やっぱり駄目だ。」と思って諦めてしまう。しかし、「はやぶさ」とプロジェクトチームのメンバーは、イオンエンジンの故障や全機能停止などのトラブルが起こっても、決して諦めなかった。そして、それに立ち向かい、前へ、前へと前進していった。

僕は、この本を読み進めていくうちに、どんな事でも、すぐに諦めてしまう自分が恥ずかしくなってきた。そして、僕の意識に変化をもたらした。綿密な計画を立てる事の重要性、最後まで物事を投げ出さずやりとげる事の大切さを知った。まだ未熟で不完全な面もあるが、二十七日間の夏休み

札幌市立宮の森小学校 5年 日達智哉

中の詳細な計画を立て、勉強と遊びを両立させる挑戦を試みた。結果として、根気よくコツコツと頑張る事ができるようになったが、「はやぶさ」のプロジェクトチームのように、計画にトラブルが生じた場合に軌道修正できるように、ある程度のゆとりを作る事が大事だと学んだ。

僕は、この「はやぶさ」の冒険を、東日本大震災で地域社会が大きな被害を受けて苦しんでいる、多くの被災地の人達にも、知ってほしいと思った。なぜなら、被災地の人達が、困難な事態に諦めずに立ち向かっていく事によって、暗闇の中に活路を見いだしてほしいと思ったからだ。被災地では、原発問題などの様々な問題を抱えているが、「はやぶさ」のミッションのように、全国民が一つのチームとなって英知を出し合い、あらゆる手段や方法を検討し、困難を乗り越えて行かなければいけないと思った。

「はやぶさ」は「イトカワ」に向かうのに、スイングバイを利用した。この技術は、ニュートンという物理学者が発見した、万有引力の法則を基にしている。まさに温故知新だと思った。僕も、基礎を大切にしながら、応用へと知識を深めていきたい。

「はやぶさ」は、流れ星となり消えた。しかし、これからも世界中を照らし続けることだろう。「希望」という名の、星となって。

(佐藤真澄 著

『小惑星探査機「はやぶさ」宇宙の旅』)

北海道知事賞

青空に描いた、魂の響への誓い

遺愛女子中学校 3年 松下海星

冬の厳しさを見せる雪のニセコ連山の峰々と真澄の青い空。この地に凜とした姿で佇んでいる美術館。小川原脩美術館がそれである。この美術館に向かう車の中で父は、彼について教えてくれた。倶知安町出身の画家で戦前は中央で活躍していたが、戦時中軍の要請で戦争記録画を描いたために画壇を追われ、二度と中央に戻ることなく故郷で絵を描き続け生涯を終えたことを。私は父のこの話を聞くまで、彼のことは一度も耳にしたことがなかった。着いた美術館はしっとりとした冷えた空気に包まれその中に彼の作品は飾られていた。年齢を重ねるごとに変化していった画風に彼の苦悩と心の軌跡を感じ、彼について触れたいと思った。そして、美術館の片隅にひっそりと置かれていたこの本を手を取った。

私は、なぜ彼は軍の要請を受け入れたのか。軍の命令に逆らうことはなかったのだろうか。戦争画を描くということは多くの尊い命を奪い合う戦争に加担することになると考えなかったのだろうか、と批判的な思いを抱きつつ一ページ、また一ページと本を読み進めていった。そのような私の思いを受け止めるように小川原氏は、静かに私に語りかけてきた。

「個人の意志とは別に、社会の一切が大きな圧力となって一つの方向に強く動いていく。この時代環境の中で、その圧力に抗した人はほんとうに強い人なのだし、私は残念ながら、順応という一番楽な道を歩いた。」と。

思想や活動が全て統制されていたあの軍国時代。民衆は「お国のため」という名のもと戦地に送り出されていた。彼もまた絶対的な命令の中で自分の意志を封印して戦争画を描き続けた戦争犠牲者の一人だった。私は何不自由な平和な時代を通して彼を見つめようとしたことをとても恥ずかしく思った。私はどうなのだろうか。現在私は学校の新聞局で、行事などを取材しまとめ壁新聞を掲示したり、またインターネット部では、各部活の様子をホームページに掲載するなど、情報を発信する側にいる。自分の考えや取材の内容を自由に表現して、見る人にとって生きた情報となるようにと思いながら活動している。しかし、今がああ暗黒の時代であったなら、私は活字を通して抵抗者として真実の情報を発信し続ける勇気を持てるのだろうか。もしかしたら、私も彼と同じように理不尽の中で「生きるための」順応という自分の意志に背いた道を選ぶかもしれない。そのような考え方を持ってしまう自分が怖くて情けなく思う。そして、人間の良心を闇に葬り「思い」を簡単に変えてしまう戦争を心から恐ろしいと感じた。

戦後、彼は戦争画の責任追及という世間の厳しい批判

を受けた。と同時に、自分と同じく順応者だった人たちの巧みな身のこなし方を中央から遠く離れた故郷で知る。どんな思いでこの事実を受け止めたのだろう。この時代の彼の作品は、個と群の中に動物を、そして、北海道の自然を多く描いている。人間社会から離れ、物言わぬ動物を対象画とし、厳しい自然の季節の変化の中に精神的な支柱を求めつつ、戦時中の自分の罪と向き合おうとしたのではないだろうか。孤独の中での彼の心の痛み、苦しさ、哀しさを思うと胸が張り裂けそうになる。そして、彼の魂の叫びと絶え間ない心の問答の響きが絵筆に託され数々の作品が生まれてきたのではないかと思う。

長い年月が流れ、戦後四十三年、小川原氏が七十七歳のとき〈遙かなるイマージュ〉という生き方の原点にたどり着いた。彼は、

「私の目指すものは、とても、手のとどかない高さにあると知りつつも、それに近づくための努力ではないかと思うようになった。その積み重ねだけが、私をかり立ててくれるのだ。私の心の内側で求めてやまないもの、それが、〈遙かなるイマージュ〉の意味するものなのではないかと思う。」

と述べている。一人、絶望感の中で希望を忘れずに前を見つめて戦ってきた彼の重く深い思いが伝わってくるような気がする。そして、それは、未来を歩んでいく私たちへのメッセージのように思える。どのような困難が自分に与えられても時代や人のせいにせず、自分自身の中で耐えて真摯に生きていくことの大切さを伝えたいのだと思った。私は、強く生きるということを今まで実感としてとらえることができていなかった。しかし、彼の人生に触れ、人としての生き方が判った気がする。

六十六年前の終戦の年と同じように暑い夏の日。再び美術館を訪れた私の目の前に羊蹄山が私を圧倒するかのよう太陽の日差しをいっぱい受け輝いていた。夏の風のそよぎと小鳥のさえずりが様々な音色と音程となって青空に響き渡っていた。その奏でられた音色は戦時中のこと全てを自分の心の中に封印し亡くなるまで自分の生き方と対峙していった小川原氏へのレクイエムのように聞こえた。

私は、未来に向けてもう二度と戦争という不寛容な時代を作らないこと、責任を持って人生を歩いていくことを青空に誓った。

(新明英仁 著

『小川原脩 ～遙かなるイマージュ～』)

北海道知事賞

「この坂を越えた先に…」

北海道札幌旭丘高等学校 3年 伊澤 咲 弥

アスファルトに覆われた急な坂道の先に、私の通う学校がある。藻岩山に抱かれ、緑に包まれた校舎「この坂越えん」我高の校訓ともいうべき、道標だ。一步一步確実に進む。その先には、新しい世界が広がるという意味を持つ。冬は滑りやすく、夏は地面の照り返しで熱いこの坂を登りきり、校舎に入ると、地球は丸いと感じる程どこまでも続く空と、市内中心を一望できる雄大なロケーションが私を迎えてくれる。緑の木々の中をかけてくる風は心地良く、草の匂いを運んでくれる。教室の窓から見えるこの風景は、私を無の状態にしてくれる。私はここが大好きだ。急な坂も、風景も。音和が通学することになった新しい学校。私の大好きな風景と似ていると思った。緑豊かな自然に囲まれたこの学校を、音和は好きになれど感じた。

夏休みの間に、音和の生活は激変した。親の離婚、父の会社の倒産、転校。父と暮らすことを選択した音和。新しい学校にも全く期待をせず、心を閉ざしていた音和に、新しい担任の先生は、「意識を変えろ。ルールが変わったんだ。」と初めて会った時に言う。驚いた。音和の動揺も環境の変化も、端的に伝える言葉を持っているこの先生なら、音和を受け止められると思った。私もこの先生に会ってみて、話を聞いてみたい。先生の話は、どれも魅力的で、人が生きていく上での大切なことを教えてくれる。決しておしつけではなく、引き込まれていく。

「大切な風景は、想像の目でみるもの」と先生は言う。目で見ることも大切だ。しかし、見られないものもある。私が中学生の時、戦争の体験談を聞いた。見たこともない戦争・原爆の恐ろしさが、その方の話を聞いているうちに、実際に見ているかのように、その場にいるかのように思えて、今でも脳裏に焼きついている。戦争を繰り返してはいけないということを、私も後世に伝えていかなくてはならないと強く思った。この時私は、想像の目で恐い風景を見ていた。興味があることは、どんな小さなことも見えてくる。空想の世界にどっぷりと浸ることで、知らない世界を見ることで、驚きや感銘と共に、笑いや涙が自然とこぼれる時がある。しかし、最近では現実しか、目で見えたものしか受け入れられなくなりつつある。「想像の目」。想像の世界を見る心の余裕がなくなっている。夢の世界へといざなってくれる絵本の世界が大好きだった幼き頃。時間がたくさんあった。何故だろう。時の速さは変わらないのに。何かに追い立てられ、目の

前の現実が重くのしかかり、焦り、不安が強くなる。それらが強くなる程、想像の世界への陶酔が難しくなっていた。音和も同じだったのではないかと思った。以前の音和は読書が大好きで、想像の世界を旅することが出来た。しかし今は、笑う余裕さえもなくなっていた。激変した生活の中で。それでも、先生との出会い、部活での仕事や友との出会い。伝書鳩を育てることで、ゆったりとした時間が戻ってきたように思う。音和の心に余裕が出てきたのだと思った。ひなたの匂いが心地良いという小さな幸せを見つけ、父に対するわだかまりも融けていった。音和は、大切なものを見て、感じる事ができた。

音和の担当になった翔べない伝書鳩、「コマメ」。翔んで危険を伴うよりも、翔ばずに誰かの肩に乗り移動した方が…。楽な道を選ぼうとする私の貧弱な発想をよそに、コマメは翔んだ。最初は小さく着地しただけだったが。音和たちの、「飛べ」という期待に応えるかのように翔んだ。「飛ぶ」という本能をとり戻した。コマメが大空高く羽ばたいた時、まぶしいまでも光る太陽の日を浴びて、コマメに何が見えたのだろうか。コマメが見ている風景を、音和も見ようとしているのではないか。吉岡先輩に、「頭よりも高い所に、目があるつもりでいる。そうすれば、自分がよく見える」と言われてから、高い所に意識を持つように、いつも心掛けていた。先生が言う想像の目と似ている。大切なものが見える。自分を見失うことなく。だから音和も、コマメのしている風景をどこかで見ているのではないかと思えた。私は？私も大海原を飛び越えて、知らない世界を、想像の世界を見てみたい。今は、現実しか見えず、一人でもがき苦しみ、迷いという大きな壁を越えられない自分がある。鳩が翔び立つ時、大きく力強い羽音を出すのを、私は聞いたことがある。私もそんな力で必ず、大きく立ちはだかる壁を翔んでみせる。その時、私にも違う世界が見えてくるだろう。

あと半年で私は、今いる大好きな風景から卒業する。音和の通学路に生えているコナラやクヌギのように、したたかに生き延びて、素手で引き抜くことのできない大木になろう。大切なものを見る目、想像の目を持てる大人になろう。試練だった二学期を、音和が笑顔で終わったように。私も笑顔で、この坂を越えて、未来に翔べたこう。

(長野まゆみ 著『野川』)

北海道議会議長賞

「あかちゃんがいるの！」を読んで

函館市立深堀小学校 2年 漆 畑 元 基

お母さんは、強い。とっても強くて、かなわない。でも、当たり前なんだ。それは、お母さんから、いのちが生まれるんだから。

ぼくのお母さんは、うるさい。いつも、ガミガミ。つかったものは、かたづけなさい。あいさつは、大きな声で。色んなことを、どんどん言う。もう、うるざりだ。さいきん、『はんこうき』と言われた。いやなことばだ。

でも、お母さんのことは、大すきだ。お父さんのこともすき。こんなに言われていやなのに、やっぱりすきだっていうのがおかしい。

それが、この本を読んでほっとした。赤ちゃんは、おなかの中でお母さんといっしょにすごす。たくさんお母さんに話しかけられて、たくさんの人に心ばいしてもらって生まれる。

ぼくが、おなかにいた時のことをお母さんに聞いてみた。本と同じで、よくぼくに話しかけていたこと。ぼくは、おしりの方をよくけていたこと。男の子とわかってから、ふくを買って広げたりたたんだりしていたこと。そして、今のぼくぐらいの子がおなかをさわった時、ぼくがうごいて

びっくりしたんだって。一人なのに二人って、本当にうれしい。

お母さんは、生まれてくるのが楽しみで、一生けんめい生んでくれたとわかった。何だか、うれしい。うるざりしている時じゃない。

夏休みに、家ぞくでキャンプに行った。とれたての野さいをたくさん買ってカレーを作った。米とぎも野さいを切るのも火かげんも、手つだってもらいながら一生けんめい作った。

できあがったカレーを、みんなで食べた。

「とっても、おいしいよ。ありがとう。」

と、何でも言ってもらった。本当にうれしかった。作っている時に、話したのも楽しかった。色んなことをいっしょにしたり、話したりすることが、家ぞくなんだとわかった。

つたえ合うことは、大じなことだ。話したくない時もあるけど、今までよりもっと、家ぞくと、そして友だちと話し合っていきたい。今、ちょっと大人になった、ぼくがいるよ！

(津田真帆 著『あかちゃんがいるの!』)

総 評

みずみずしい感性で、自分らしい感動を作品に

審査委員長 浦田日出雄 (札幌市立西岡小学校長)

全道各地区から厳しい審査を経て選び抜かれた597点の作品を25名の審査員が5つの部に分かれて各作品を丹念に読ませていただきました。

自ら選んだ一冊の本と出会い、そしてその感動を健康的でみずみずしい感性で表現し、自らの現在の生活を振り返り、自らの生き方と重ね合わせながら、真摯に向き合っている姿に頭が下がります。そのような多くの作品に今年も出会えたこと、心よりうれしく思います。

「小学校低学年」では、自分の考えが素直に表現されていて、本を読んだ感動が、読み手に伝わるような感想文が多くありました。

「小学校中学年」では、本の世界に浸り、自分の思いを豊かに表現し、自分の生活をよりよくしていこうとするたくましさを感じました。

「小学校高学年」では、東日本大震災にふれた、広く社会の出来事考えた作品が多くありました。

「中学校」では、読書によって生まれた視野の広がりや自己の変容を分かりやすく表現した力作が多く、書き手の心情を感じさせられました。

「高校・勤労青少年」では、生と死、命の大切さについて考えた作品や本質を捉えた鋭い感覚で力強く表現された作品がみられました。

以上は各部門の特徴ですが、全体を通して今後に向けて工夫したほうが良い諸点についてお伝えしておきます。

○ 本の説明や紹介が長くないこと

○ 一部分の文章だけを重視しないこと

○ 読書を通して自分と対峙し、思索を深め、自分らしい表現を工夫すること

○ 本からの引用が多すぎることがないようにすることや本から離れて作文になってしまわないようにバランスを考えること

○ 原稿用紙を最後までしっかりと書くこと

○ 誤字や脱字などに注意し、何度も推敲を重ねること

限られた字数の中で、自分らしく表現するためには何度も推敲したり、本を読み返したりすることが大事です。清書をおろそかにしないことが大切です。来年、さらにすばらしい作品に出会えるよう期待します。

結びに、ご指導にあられた全道各地の先生方や保護者の方々に心より敬意を表します。

北海道議会議長賞

命の輝きを忘れない

留萌市立留萌小学校 4年 野々村 奏 風

ぼくは、今までにいったい何本のかん電池を使ってきたのだろうか。おもちゃや時計の電池が切れた時、当たり前のように新しいものと交かんし、何も考えずにまた動き出す様子を見て心をおどらせていた。

この本を最初に手にした時は、電気の発明のことが書かれているのかなと思っていた。でも、一ページ目の『命の詩』を読んだ時、まるで体中に強い電流が流れるような気がした。そう、それは、ぼくの命の電流だった。

この本に登場するゆきなさんは、ぼくと同じ四年生。小さいころに『神けい芽細ぼうしゅ』という病気におかされ、十一歳でこの世を去ってしまったという内容の実話だった。

病院の中にある学校（院内学級）で理科の勉強をしていたゆきなさんは、かん電池の実験で豆電球がピカッと光るのを見て、自分の命はまるで電池のようだと考えた。「電池は大切に使うと長持ちする。使えなくなったら新しい電池と交かんすればいい。でも、命の電池は交かんすることができない。だからこそ、自分の命も大事にしよう。病気でも力いっぱいがんばろう。」と……。

ぼくは、ゆきなさんと同じ学年なのに、毎日を深く考えることもせず、わがままいっぱいに生きている。父や母に注意されても、その場しのぎで「明日またやればいい」とか、めんどろなことは人まかせにしたり次に回したりしていた。でも、ゆきなさんにはそんな時間はない。明日の朝ですら本当にやってくるのかわからない。

ぼくは今までぼくの電池^{いのち}を大切に使ってきたのだろうか……。この命の電流をこれからどんなふうに大切にしていけばいいのだろう。何度も何度も考えたけれど、これだという答えはみつからない。日々の生活の中で一番大切なことなのに、そのことをいつも忘れてしまう。交かんのできないぼくの電池^{いのち}なのに。ぼくは病気でないから命というものを大切にしてみなかつたのだろうか？ゆきなさんは病気になったからこのように感じたのだろうか？いや、ちがう。ゆきなさんは病気になる前からずっと一日一日を大切に生きていた。家の手伝いを進んでしたり妹たちをかわいがったり、いつも周りのことを考えながら自分の出来る事をせいっぱいやりとげ、笑顔をたやさなかった。そして病気になってからも前向きに治りように専念し、同室の友だちを気づかたりはげましたりもした。大切な友だちが何人も旅立っていくのを見ていたのに。ぼくなら、たえられるだろうか？明日にも死がまっているかもしれないこの現実。

ぼくは、この本に出会って、『本気で生きる』という意味を学んだような気がする。

だから、これからぼくは、かん電池を見るたびに生きる意味を思い出そう。何年も月日がたって、やっと神様から与えられた命だから。ゆきなさんのように、命が『疲れた』と言うまでせいっぱいに生きることを……。

この命の大切さをいつまでも忘れないために。

(宮本雅史 著 『電池が切れるまで』)

優 秀 賞

小学校（低学年）の部（12名）

作 品 名	氏 名	学 校 名	学年
・「アンネ・フランク」をよんで	西 川 桃 花	函館市深堀小学校	2年
・「花さき山」をよんで	白 土 理 子	函館市北美原小学校	1年
・たすけてあげたい	池 田 登 唯	室蘭市高平小学校	2年
・ムーミンのふしぎを読んで	澤 中 柚 乃	函館市深堀小学校	2年
・「ものすごくおおきなプリンのおかげで」を読んで	長谷川 華 子	小樽市色内小学校	1年
・おかたづけがんばるもん	吉 田 舞衣華	旭川市啓明小学校	1年
・「エディのやさいばたけ」を読んで	高 瀬 美 潤	函館市金堀小学校	2年
・「がっこうかっぱのイケノオイ」をよんで	吉 田 千 桜	教育大附属函館小学校	1年
・「あかちゃんがいるの！」をよんで	井 上 瑞 貴	岩見沢市日の出小学校	1年
・あかちゃんがいるの！	大 槌 真 緒	函館市磨光小学校	2年
・「あかちゃんがいるの！」を読んで	下 山 菜 緒	函館市えさん小学校	2年
・あかちゃんがいるのをよんで	高 宮 果 優	旭川市緑が丘小学校	1年

小学校（中学年）の部（12名）

作 品 名	氏 名	学 校 名	学年
・自分で決めたことをやりとげる力	斉 藤 梨 央	森町森小学校	4年
・「ピロードのうさぎを読んで」	三ッ江 綾 乃	小樽市緑小学校	4年
・時にはひつよう「ずる休み」	三 上 大 翔	室蘭市海陽小学校	3年
・「さがせ、人気者のひけつ」	福 井 妃 菜	北斗市島川小学校	3年
・人と人とのつながりを感じて	児 玉 優 子	札幌市西野第二小学校	3年
・「ホスピタルクラウン・Kちゃんが行く」を読んで	小 川 尊	岩見沢市日の出小学校	4年
・かんことじっちゃんの大切な石	市 川 茉 希	士別市士別南小学校	3年
・悲しみを乗り越えて	竹 本 香 織	八雲町東野小学校	4年
・「星になった鮭」を読んで	細 谷 優 斗	函館市深堀小学校	3年
・「わたしのとくべつな場所」を読んで	岡 村 咲愛璃	北斗市上磯小学校	3年
・自由へのとびら	高 橋 早 紀	苫小牧市北光小学校	4年
・「星になった鮭を読んで」	柿 崎 理 志	旭川市東五条小学校	4年

小学校（高学年）の部（12名）

作 品 名	氏 名	学 校 名	学年
・「母さん、ぼくに光をください」を読んで	西 尾 彩 花	岩見沢市東小学校	6年
・「いのちのひまわり」を読んで	野 上 夏 奈	旭川市神居小学校	6年
・「ぼくの職場は富士山です」を読んで	菊 池 亮 佑	函館市青柳小学校	5年
・「犬たちをおくる日」を読んで	山 方 未 裕	留萌市東光小学校	6年
・「一つになるすばらしさ」	笹 悠里子	岩見沢市幌向小学校	6年
・素直な心が手にする切符	鈴 木 ありす	滝川市滝川第三小学校	6年
・「クジラと海とぼく」を読んで	長 瀬 聖 揮	音更町下音更小学校	6年
・こども電車を読んで	熊 澤 由 真	室蘭市白鳥台小学校	6年
・「エゾシカ」が教えてくれたこと	池 田 開	帯広市稲田小学校	6年
・「生命 ^{いのち} 」	山 田 理 絵	小樽市緑小学校	6年
・「エゾシカ」を読んで	阿 部 優 希	函館市大船小学校	6年
・エゾシカが生きる森	北 尾 剛 寛	室蘭市海陽小学校	6年

優 秀 賞

中学校の部 (15名)

作 品 名	氏 名	学 校 名	学年
・「夏の庭-The friends-」	佐藤 亜 有	岩見沢市栗沢中学校	1年
・「生きています、15歳。」	松崎 杏	森町森中学校	3年
・すべては神様から与えられたこと	齊藤 真 由	札幌市啓明中学校	3年
・「月光の夏」を読んで	佐々木 奏 子	遺愛女子中学校	3年
・「たったひとつのたからもの」を読んで	原 拓 真	月形町月形中学校	2年
・「どうせ無理」撲滅宣言	小山 結 子	滝川市明苑中学校	3年
・もう一つのヒロシマ	磯田 雄一朗	登別明日中等教育学校	3年
・『夢をつなぐ山崎直子の四〇八八日』を読んで	斉藤 有 里	室蘭市翔陽中学校	2年
・自信をもってたくましく	小林 大 暉	登別明日中等教育学校	3年
・無償の愛～高橋さんから学んだこと～	佐藤 彩	旭川市北都中学校	2年
・差別を生む心を無くす志	中島 滯	七飯町大中山中学校	3年
・「いのちのしずく」を読んで	加能 里 菜	小樽市松ヶ枝中学校	1年
・「無私の心」に愛を感じて	明戸 千 尋	札幌市発寒中学校	3年
・高橋房次医師の生き方	館山 朋 見	函館白百合学園中学校	3年
・差別という酷さ	長谷川 璃 花	函館白百合学園中学校	3年

高等学校の部 (13名)

作 品 名	氏 名	学 校 名	学年
・森の中の居場所	岸 香菜子	岩見沢東高等学校	3年
・「命」の輝き	斉藤 唯	岩見沢東高等学校	2年
・「博士の愛した数式」を読んで	大下 紘 佳	岩見沢東高等学校	1年
・「生きているということ」	林 菜 穂	札幌啓成高等学校	1年
・精神病と向きあう	目加田 飛 鳥	旭川東高等学校	1年
・「夢」から醒めてみつけた愛	水川 優 泉	函館白百合学園高等学校	1年
・「たぶらかし」を読んで	増子 郁 夢	帯広南商業高等学校	3年
・「母と子の絆」	小川 莉 奈	帯広柏葉高等学校	2年
・踏み出す、その先に…	高倉 美 優	旭川東高等学校	1年
・一步の勇氣	佐々木 律 佳	岩見沢東高等学校	1年
・あの頃の気持ち	石山 綾 乃	登別明日中等教育学校	2年
・野川のある風景	藤本 倫 佳	北広島西高等学校	2年
・鳥の目になって	蓑島 福 子	旭川藤女子高等学校	2年

優良賞

小学校（低学年）の部

室蘭市八丁平小	2年	西川 未来
旭川市永山西小	2年	村上 敬人
留萌市潮静小	2年	渡辺 愛結
岩見沢市第一小	2年	佐藤さゆり
帯広市啓北小	2年	島田 啓生
北見市小泉小	2年	渡 杏美
旭川市朝日小	2年	朝倉 正樹
函館市高丘小	2年	瀬川 桃彩
旭川市神居小	2年	野上 寛太
苫小牧市豊川小	2年	伊藤 快
八雲町山崎小	1年	中嶋 愛結
苫小牧市糸井小	2年	杉 日菜子
札幌市新琴似南小	2年	山田 小羽
小樽市緑小	1年	樽見 修也
小樽市緑小	1年	笹原 悠生
旭川市旭川第三小	2年	井上 絢渚
旭川市神楽小	2年	中島 瑠花
旭川市近文小	2年	北川 琴花
室蘭市八丁平小	1年	磯部 真緒
函館市えさん小	2年	三浦 彩華

小学校（中学年）の部

森町鷺ノ木小	4年	仙石頼之介
小樽市緑小	4年	中村 涼
旭川市旭川第三小	3年	石川 茉奈
室蘭市地球岬小	4年	大川 瑞姫
旭川市東五条小	4年	西村 玲美
苫小牧市錦岡小	4年	河毛 亜美
室蘭市八丁平小	4年	堀 優明香
室蘭市高平小	3年	河内 知尋
函館市大船小	4年	西田 愛菜
岩見沢市南小	3年	櫻庭 央樹
岩見沢市中央小	3年	藤田 花

札幌市屯田北小	3年	安永 響
小樽市緑小	4年	樽見 楓南
札幌市手稲北小	4年	竹達 望結
函館市北美原小	4年	上野 礼人
旭川市永山小	4年	鴻上 鉄馬
教育大附属旭川小	4年	大熊菜亜那
苫小牧市清水小	3年	石川 真由
函館市八幡小	4年	正木 咲楽
岩見沢市中央小	3年	松尾 里咲

小学校（高学年）の部

旭川市東五条小	5年	酒元 美月
室蘭市旭ヶ丘小	6年	田中 理紗
月形町月形小	5年	杉山 琴音
浦河町野深小	5年	吉田 梨緒
小樽市緑小	6年	相澤 杏奈
函館市北美原小	5年	北川 能大
旭川市永山小	5年	長崎ひより
岩見沢市美園小	5年	前田 裕子
旭川市永山小	6年	岡 菜々花
小樽市緑小	6年	平井 天音
知内町知内小	6年	松井 悠南
森町駒ヶ岳小	6年	黒滝 希路
室蘭市旭ヶ丘小	5年	森元 寧々
帯広市森の里小	6年	杉浦 文子
岩見沢市美園小	6年	男澤 果林
小樽市緑小	6年	林 あゆみ
室蘭市旭ヶ丘小	6年	渡辺 慧人
旭川神楽小	6年	中島 萌花
旭川市知新小	5年	佐藤 友莉
旭川市知新小	5年	青木 元

中学校の部

岩見沢市光陵中	1年	江藤 春花
岩見沢市緑中	3年	富田 智晶

岩見沢市緑中	2年	矢守 央奈
留萌市留萌中	1年	相馬 悠汰
留萌市港南中	3年	近藤 湧
留萌市港南中	2年	船越 歌乃
留萌市港南中	3年	祐川 沙紀
八雲町野田生中	3年	竹本 遥香
苫小牧市明倫中	2年	水谷 空夢
藤女子中	1年	野田 梨華
旭川市東光中	3年	土田 優衣
教育大附属旭川中	2年	堀 紋歌
旭川市忠和中	1年	石坂 綾乃
旭川市永山中	1年	藤田 そら
室蘭市北辰中	2年	羽場優樹美
帯広市帯広第二中	1年	緑川 れい
岩見沢市明成中	1年	小橋 日菜
登別市西陵中	3年	西田志穂子
旭川市常盤中	2年	岡本步奈実
札幌市発寒中	3年	中川さくら
藤女子中	2年	宮川 菜奈
滝川市開西中	3年	吉原 真梨
旭川市北門中	1年	板谷実朱花
岩見沢市光陵中	1年	山本 小夏

高等学校の部

岩見沢東高	3年	荻原 由香
岩見沢東高	3年	朝倉 若菜
旭川東高	1年	片岡 美菜
旭川東高	1年	武田 生吹
旭川東高	1年	山崎奈美子
旭川東高	2年	倉本 圭脩
旭川東高	2年	橋爪 翠
旭川西高	2年	吉田 沙羅
旭川西高	3年	上西のどか
旭川藤女子高	2年	坂東 頌子
登別明日中等教育	1年	菊地 ねね

小樽市支部

小樽市学校図書館協議会は昭和24年に発足しました。現在まで北海道学校図書館研究大会を4回開催し、図書館運営、読書指導や資料の活用など、その時期ごとの課題を取り上げ、研究発表や授業公開を行ってきた歴史ある団体です。

小樽市青少年読書感想文コンクールは今年で第41回を迎え、11月26日（土）に表彰式を行います。小樽市学校図書館協議会では、これまで長きにわたって、子どもと本をつなぎ、豊かな心を育て、学びを深めるために地道な努力を重ねてきた先輩の先生方の思いを現在の学校図書館に生かすべく取り組んでいます。

これまでに、市立小樽図書館との共催での一般市民と教職員向け「ワークショップ（篆刻や筆文字でデザインしたブックカバー作り）や北海道学校図書館協会研究部長 佐藤敬子先生を講師にお招きしての「学び方指導研修講座」、市内の学校図書館をリニューアルする「学校図書館クリニック」、「図書館だよりの作り方研修会」などを企画運営して参りました。

平成25年度第40回北海道学校図書館研究大会の開催地が小樽市に決定し、2年後に向けてさまざまなプランを作り始めているところです。とりわけ、学校と学校、学校と公共図書館をはじめとする他団体をつなげ、市全体で子どもの学びや読書活動をささえていくための活動を行いたいと意欲を燃やしているところです。

文責 小樽市学校図書館協議会 事務局長 森 万喜子（小樽市立潮見台中学校 教頭）



第40回小樽市青少年読書感想文コンクール表彰式の様子

第53回(平成23年度)北海道図書館大会の記録

平成23年9月1日(木)～2日(金)、藤女子大学を会場に開催された図書館大会で、当協会が担当した分科会の記録を報告します。

■第3分科会

「アニメーション その理論と実際」

講師：札幌市立石山南小学校 司書教諭 佐藤 広也

講義の内容

①アニメーションの捉え方

1984年スペインのマリア・モンセラ・サルト氏により提唱された。

いろいろな方法で、いつでもどこでも素材を活かすことができる手法である。

例：外に出るアニメーション

地域に生息するザリガニの学習をきっかけに、子どもたちに物語をつくらせるという実践の紹介。

提唱されたころのアニメーションから、様々に実践が積み重ねられ、実態に応じたアニメーションの形があるという佐藤先生。

「素材がどう、そうどう(ノイズ・イメージーション・クリエイティブ)を働かせられる対象であるかどうかを考えていくと、日常の様々な事象でも、アニメーションはできる。」というお話に、参加者としてあっという間にアニメーションの世界に引き込まれていきました。

②図書を使った実践の具体例

○絵本「うんち」では、アジア象のうんちの実物を提示し、そこから「動物はえらい」「クイズ動物の手と足」テーマに児童の興味を広げていく実践。

○小さい絵本「わたしのせいじゃない」

拡大かみしばいにして実践。

○電子書籍「星のおじいさま」を使つての実践。

○大型本「はらべこあおむし」の実践。他

様々な実践例と豊富な素材をたくさん紹介してくださいました。アニメーションをする側も、そうどう(ノイズ・イメージーション・クリエイティブ)が大事だということだとあらためて感じました。

③模擬アニメーション「ダウトをさがせ」で楽しもう。

「はらべこあおむし」を読み聞かせた後、参加者が児童になったつもりでアニメーションの実験を経験しました。はじめは、「ダウト!」と大きな声を出さなかった参加者たちも、佐藤先生の誘導で楽しいアニメーションの世界にあつという間に引き込まれていきました。

佐藤先生のおっしゃる「一冊の本を宝島にする」ということはどういうことかがよく分かった、楽しく充実した時間を忘れてしまう講義内容でした。

(文責：札幌市立清田南小学校 教諭 出町 南)

■第4分科会

「学校図書館と公共図書館の連携の在り方」

報告1：札幌市立福住小学校 校長・北海道学校図書館協会 会長 大久保 雅人

A・北海道SLA、小学校、札幌市それぞれの取組

北海道SLAでは「学校図書館の充実・発展を図り、教育の振興に努めることを目的」とし、様々な活動を行っている。小学校では、知識基盤社会の時代に「自立した社会人」を育成するため、言語活動の充実は不可欠なものとして位置付けられている。そしてそれを支える条件として、読書活動の推進や学校図書館の活用が重視されている。また札幌市では「札幌らしい特色ある学校教育」のテーマの一つに「生涯にわたる学びの基盤『読書』」を掲げている。

B・読書推進計画等による連携の取組

「北海道読書活動推進計画」、「北海道立図書館運営計画」、「第2次札幌市子どもの読書活動推進計画」等、新たな取組が実行、計画されている。

C・学校図書館と公共図書館の連携の在り方

学校としては、学校体制として読書に親しむ環境を整え、

図書を活用する際に保護者や地域を含め様々な人がかかわるといことが重要なポイントとなっている。今後は公共図書館の資源や機能をさらに活用できるよう、環境を整備することが大切である。公共図書館にあつては、蔵書の貸出だけにとどまらず、物流の提供や研修への協力等を通じ、地域の学校に対する支援を率先に行うことが期待されている。



報告2：江別市情報図書館 司書 徳下 公子

A・情報図書館司書派遣モデル事業

平成18年度より江別市内への小学校と中学校に累積27校派遣されている。業務内容は児童・生徒の読書相談、図書館内の整備、図書選定への協力、学習支援等、多岐にわたる。

B・学校向けサービスの実施

「場の提供」、「ものの提供」、「ひとの提供」という3つの柱でサービスを行っている。「場の提供」としては、利用者が来館して行う施設見学や体験学習を行っている。「ものの提供」としては、団体貸出を通しての資料の提供をしている。「ひとの提供」としては、修理講習や相談等の学校図書館活動全般の支援を行っている。

C・派遣事業やサービスの効果と問題点

学校図書館に対する意識が向上したことや、サービスが明確化されたことが大きな成果である。その中で、司書一人一人の技術にばらつきがあることや、短期間の派遣なので継続が難しいことなどは、改善が必要な点である。また、情報伝達が困難なこと、現時点では物流がないことなどは、今後の課題である。

(文責：藤女子中学高等学校 教諭 佐藤 淳)

■第7分科会

「ブックトーク その理論と実践」

講師 岩見沢市立栗沢小学校 司書教諭 古関亮子

「ブックトークとは、ある特定のテーマのもとに様々な分野から複数の本を選び、それらの本を有機的につないで紹介すること」である。

ブックトークは自由なテーマ、教科に関連したテーマにかかわらず、聞き手の知的好奇心を喚起し、読書の楽しさを伝えることを目的としている。

この分科会では、ブックトークの理論と学校内で実施されている事例をパワーポイントで説明し、実際に講師によるブックトークが行われた。講師の勤務校で行われている事例の中から、授業の教科単元に関連したものを中心に紹介された。授業内で行うブックトークは、授業の導入時や終了前の時間を使って実施すると効果的である。したがって所要時間は5分から10分程度で、紹介する本の冊数も5、6冊である。

質疑応答後、参加者全員がグループに分かれブックトークのシナリオを作成するという実習を行った。小学校5、6年生の国語、社会、理科の教科書からテーマを絞り込み、実際に用意された本の中から一人一冊の本を選び、シナリオを作成し、最後に3つのグループがリレーブックトークを行った。

参加者を館種別にみると公共図書館の司書や職員が多く、公共図書館の方より、「教科書の単元で使う本があらかじめわかれば用意したい」という意見や「教科書会社のホームページや学校の担当者と連絡をとる」などの具体策が出された。

小学校での授業や学校図書館を取り巻く状況を知っていたら、より機会になり、今後の学校図書館と公共図書館の連携に必要な情報の一端を提供できたのではないかと感じている。

(文責 札幌聖心女子学院 司書 新田 裕子)

学校図書館情報

◆第44回北海道学校図書館研修講座へ参加を基本がわかる！ 具体的にわかる！

- ・日時 1月10日(火)～12日(木)
- ・会場 北海道立道民活動センター(かでの2・7)他
- ・講演 「新学習指導要領と学校図書館」
文部科学省初等中等教育局
主任視学官 田中 孝一 氏
- ・講義・実習・討議・交流の充実した3日間
※詳しくは案内要項またはHPでご確認ください。

○国際子ども図書館のホームページに、研修講座の案内が掲載されました。
当協会のHPにリンクされています。

◆感想文集『北海道の読書』(平成23年度版)の普及を第57回青少年読書感想文全道コンクール入賞作品集

- 小学校版(1,000円)
特別・優秀・優良入賞者 全作品を掲載
 - 中学校・高等学校版(1,000円)
特別・優秀・優良(一部)入賞者作品を掲載
- 【申し込み・問い合わせ先】
札幌市立西岡南小学校 教諭 佐藤秀則
FAX 011-582-1590

◆第39回中学生作文コンクール審査終了

作品応募、審査協力ありがとうございました。
「輝くとき」というテーマが身近なものとして受け入れられた結果、生徒数が減少する状況下で、応募数、応募率とも前回実績を上回り、20,338点の応募が寄せられました。引き続き、参加応募校の拡大と応募数の増加を期待します。

◆第32回「絵と文による冬休み読書大賞」へ応募を!

冬の北海道独自の感想画と感想文、感想絵ハガキによるコンクールです。
「冬休み推せん図書」15冊(小学生～中学生指定)と「北海道青少年のための200冊の本」(学年指定なし)の中から本を選び、読んだ感動を絵と文で表現したり、感想絵ハガキの形で表現します。高校生は、「200冊の本」からの応募となります。学校、学年、学級単位での応募を期待します。今回もたくさんのすばらしい作品に出会えることを楽しみにしています。

事務局

〒062-0054 札幌市豊平区月寒東4条18丁目10-43
札幌市立しらかば台小学校内
事務局長 野村 邦重
TEL 011-852-4090
FAX 011-852-2379
e-mail kunishige nomura@city.sapporo.jp

ホームページアドレス

<http://www.hokkaido-sla.jp/>

Amenity B-Coat

本の破損や汚れを防ぎながら、抗菌効果を発揮するブックカバー「アメニティBコート」ポリプロピレンフィルムのため、燃焼時にも塩素ガスなど有害物質が発生せず、安心です。ご指定の上ご愛用ください。

キハラ株式会社

〒062-0035 札幌市豊平区西岡5条3丁目8-15
TEL (011) 857-3331
FAX (011) 857-5211

◆『学校図書館』NO.733 2011.11月号

「11子どもの読書と学校図書館の現状」を特集!

第57回学校読書調査報告から、子どもの読書状況と子どもたちを取り巻く生活や社会状況が見えてきます。
読書冊数はわずかに減少。シリーズものが小・中・高で人気。雑誌では、男子はマンガ、女子はファッション。放課後の時間、男子はゲーム、女子はケータイ・テレビ。
2011年度学校図書館調査報告から、①教育課程を支える蔵書の充実を、②司書教諭の時間確保を、③学校ニーズに合わせた資料提供のために経費増額を、等の課題が見えてきます。

◆第18回 学校図書館関係科目担当大学教員研究会 開催

9月15・16日、「教員養成・司書教諭課程における学校図書館活用指導の諸課題」のテーマのもと、全国SLA主催で開催されました。
文部科学省初等中等教育局：春山浩康氏の講演「文部科学省の学校図書館施策」では、新学習指導要領では「言語活動の充実」がキーワードで、全教科を通じ学校図書館の活用が盛り込まれていることが強調されました。

編集後記

例年より暖かい秋が終わり、冬らしい日が増えてきました。皆様には学期末を迎えて何かとお忙しい毎日をお過ごしのことでしょう。本号は、第57回青少年読書感想文全道コンクールの特集号です。今年も多く感想文が全道各地から集まりました。それぞれ本を読んで感じたこと考えたことを自分らしい表現で書き表しています。これからもたくさんの児童生徒の皆さんが、いろいろな本に親しんでコンクールにどんどん応募してほしいと思います。

担当：杉本 操 村山 知成 佐藤 秀則
野村 邦重 飯島 道恵